

科研費ニュース

令和3（2021）年度東京未来大学の科研費申請状況は以下の通りです。

		令和3年度						令和2年度					
		こども (保育・教育)		こども (心理)		モチベーション 行動科学部		こども (保育・教育)		こども (心理)		モチベーション 行動科学部	
基盤研究 (A)	一般	0	0	0	0	0	0	1	47,098	0	0	0	0
	海外学術調査	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
基盤研究 (B)	一般	1	7,520	0	0	1	9,735	1	5,520	0	0	1	11,340
	海外学術調査	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
基盤研究 (C)	一般	6	22,467	2	8,580	3	11,056	5	19,183	3	13,348	3	11,783
	特設分野研究	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
挑戦的研究	開拓	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	萌芽	1	3,040	0	0	0	0	2	8,378	0	0	1	2,981
若手研究 (A)													
若手研究 (B)		0	0	0	0	0	0	2	6,454	1	5,000	0	0
ひらめき☆ときめきサイエンス		1	500	0	0	0	0						
件数 / 金額		9	33,527	2	8,580	4	20,791	11	86,633	4	18,348	5	26,104
合計件数		15 件						20 件					
合計金額		62,898 (千円)						131,085 (千円)					

令和2（2020）年度と比較すると、申請の合計件数は少し減り、合計金額に至っては約半額になっています。ただし、近年は本学からの申請の採択率が高まり、昨年度は多くの採択があったことを踏まえれば、上記は必ずしも悲観的な見方をすべきことではないでしょう。とはいえ、申請あつての採択数の増加ですので、次年度は申請件数が増えることを期待したいところです。

ご自身の研究に合った種目を検討し、申請してください。詳しくは、日本学術振興会ウェブサイト内の科学研究費助成事業（科研費）の制度概要、「研究種目・概要」ページをご覧ください。

https://www.jsp.go.jp/j-grantsinaid/01_seido/01_shumoku/index.html

次年度科研費スケジュールと要領の詳細はまだ発表されていませんが、例年通りですと、9月には日本学術振興会HPで告知されると思いますので、ご確認ください。参考として、今年度のスケジュールを以下に示します。

- * 公募開始：2021年9月1日
- * 学内期限：2021年10月中旬
- * 提出期限：2021年11月上旬（厳守）

特別企画①

特別企画として、日本心理学会 2020 年度学術大会優秀発表賞を受賞された大橋恵先生に、研究内容についてお話を伺いました。

受賞された研究テーマ（ターン・藤後・井梅との共同発表）

「母親が小学生の地域スポーツにおけるチームサポートを継続する要因：ハラスメントと公正感受性の影響」



Q 1：今回受賞された研究の内容について教えてください。

放課後や週末に小学校の校庭などで小学生がスポーツをしているのを見かけます。これは、地域スポーツと呼ばれるのですが、多くは、学校の先生ではなく、保護者を中心となって運営しています。場所取り・道具の手入れ・指導者（保護者が務めるケースも多い）の手配・安全の確保など保護者がボランティアでさまざまなサポートを行うことで成立しているわけです。

ただ、余暇時間あるいは家事時間をこのボランティアに充てることになるので、負担を感じている人も多いためです。そこで本研究は、地域スポーツにおいてサポート役としての母親がどのようなときにボランティアを継続したいと考えるのかを検討しました。地域スポーツに参加中の子を持つ母親 800 名を対象にオンライン調査を行い、実際の子どものチームでの活動量に加え、ボランティア継続と関係しそうないろいろなことを尋ねました。その結果、親同士のハラスメントが強いと負担感が強く感じられ、サポート継続意図が下がることや、公正感受性（公正ではないことについてどのくらい気になるか）が負担感とサポート継続意図を調整していることなどを示しました。ボランティア研究は年配の方を対象にしたものが多いですが、自由時間が多くない中年層のボランティア行動について考えるきっかけになるのではないかと考えます。

Q 2：その研究テーマに至った経緯を教えてください。

2014 年に藤後先生・井梅先生に誘われて、子どもの地域スポーツで大人がもめる問題に足を踏み入れて以来、私自身の息子が地域スポーツをしていて保護者内の複雑な関係は見てきていたので体験をもとに研究をしています。

子どもの技術レベルや、親がスポーツに求めるものにはかなり個人差があり（実は私たち 3 人の間にもあります）、子育てスタイルなどからめて研究してきたのですが、ふと保護者同士がチームの仕事を分担し合う現象に興味が生まれました。地域スポーツでの保護者の仕事は PTA と似ている点があり、ボランティアではあるのですが、子どもが参加する以上強制参加なのですよね。ただ、時間に余裕がある程度も、家族からのサポートも、またそこから得られるものもそれぞれ違うので（下手な子は試合に出られないので活躍が見られません。親はつまらない）、なかなか難しいのです。そのあたりを研究したいと考えていた折に、学会で久しぶりに会った後輩（ボランティア研究をしている）と話が弾み、公正感受性をいれて今回の調査が生まれました。

小学 3～6 年生のスポーツをしている子どもがいる母親という、条件のある回答者を選んでの調査ですが、東京未来大学の特別研究助成金のおかげで十分な人数の回答を集められたので感謝しております。

Q 3：今後の展望などについてお聞かせ下さい。



母親のボランティアの話はひと段落と考えており、特に続きは考えておりません。ただ、私たちの研究は、保護者や指導者に分かったことをお伝えしていくことも大切だと考えています。

今までアマチュア指導者向けの本（ジュニアスポーツコーチに知っておいてほしいこと、勁草書房）、保護者向けの本（スポーツで生き生き子育て、福村出版）を書いてまいりましたが、今年には藤後先生を中心に中学校の部活動に外部から指導に入る方向けの本（上下巻）に取り組んでいます。

特別企画②

特別企画②として、日本健康心理学会「アーリーキャリアヘルスサイコロジスト賞」を受賞された野中俊介先生に、研究内容についてお話を伺いました。

受賞された研究テーマ

“Behavioral Repertoire of Families for Coping with Individuals with Hikikomori (Prolonged Social Withdrawal) in Japan”



Q1：今回受賞された研究の内容について教えてください。

今回いただいた日本健康心理学会「アーリーキャリアヘルスサイコロジスト賞」は、「35歳以下もしくはEarly Career」である会員の「健康心理学の国際学会での優れた発表」に授与されるものですが、2020年度は特例として、国際学会での発表だけでなく「英語による論文・著書・分担執筆など第一著者としての掲載」も対象とされておりました。このたびの受賞はこの特例によるものであり、日本心理学会の英文誌 *Japanese Psychological Research* に掲載された論文が対象でした。年齢的にも特例という点においても、結果として幸運に恵まれた受賞であったと感じています。

この論文は、ひきこもり状態にある人の家族（親）を対象とした調査研究であり、心理的支援において暗黙の了解とされていた、ひきこもり状態にある人への親は子どもへの対応レパートリーが少ないのではないかという仮説を検討したものでした。本論文において作成された尺度を用いてこの仮説を検討した結果、仮説は支持されず、むしろひきこもり状態にある人の家族は一部の側面において対応レパートリーが多いという結果が示されました。この結果をふまえれば、家族支援において子どもへの対応方法の獲得を目指す従来のアプローチが必ずしも有効なケースばかりではない可能性があり、この観点からの個人差を理解するためのアセスメントの必要性が考察されました。

Q2：その研究テーマに至った経緯を教えてください。

これまでの心理的支援の実践や家族会との連携から、同じ「ひきこもり」ケースといってもその状態像は多様であり、どのようなアプローチが必要とされるかはケースによってまったく異なるということを感じておりました。また、「必要なアプローチはケースによってさまざま」である一方で、どのような人にどのようなアプローチが必要なのかを適切にアセスメントできる観点を明らかにしたいと考えておりました。今回の研究テーマもその一環として考えていたものでした。

Q3：今後の展望などについてお聞かせ下さい。

受賞された今回の研究は限界点も多くあり、新たに生じた疑問もあります。今後も引き続き、ひきこもりケースの家族支援において必要なアセスメントの観点を研究テーマの1つとして続けていきたいと考えております。また、現在はひきこもり状態にある本人への心理的支援に焦点を当てた研究や、欧米や日本以外のアジアにおけるひきこもりケースとの文化差に焦点を当てた研究を始めており、それらを体系的に整理することによって少しでも心理的支援に役立つように知見を蓄積していきたいと思っております。

特別企画③

特別企画として、学会賞を受賞された磯友輝子先生に、研究内容についてお話を伺いました。

受賞された研究テーマ

「保育士同士の効果的なコミュニケーション」

Q1：今回受賞された研究の内容について教えてください。

この研究は、日向野先生が代表の科研費（挑戦的研究（萌芽）「潜在保育士の保育士就労促進に対する職場の人間関係と社会的スキルトレーニングの効果」の一環として行われたものです。磯・日向野・藤後・山際・高橋・角山の6名の連名で2019年10月に行った研究報告に対して、電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーショングループ「令和2年度ヒューマンコミュニケーション賞」を頂きました。

認可・認証保育園の園長を対象にインタビューを行い、「保育士の連携がうまくいっている時のコミュニケーションの様子」の状況について語られた内容を書き起こして、KHcoder（樋口，2014）を用いて探索的に分析しました。発言された言葉の共起関係から、良好なコミュニケーションでは職務に関するもののほか私的な話題が話されていること、保育園の規模によってその内容が異なることが示されました。園長の認知に基づく、第三者による観察を経た結果ではないという客観性の問題はありますが、日々保育士の近くでコミュニケーションを観察している組織の長の立場だからこそわかる特徴が示されています。各メンバーが面接者となりインタビューを行いました。そこで引き出された貴重な発話データがなければ明らかにできなかった結果です。

Q2：その研究テーマに至った経緯を教えてください。

深刻な保育士不足の解消のために、潜在保育士の活用に注目が集まっています。私を除く5名の先生方は、「保育士のコミュニケーションスキルと就労意欲の関係性」をテーマとして、潜在保育士、現職保育士および保育士養成校の学生を対象とした研究実績を積み上げられてこられました。その中で、1年未満の勤務年数で保育士が離職する理由は、職場の人間関係によるところが大きいことが示されています（日向野他，2018）。しかしながら、潜在保育士の再就職支援の取組は保育実技や安全、保護者対応に関する研修が主であり、コミュニケーション能力や職場の人間関係を良好に築く能力を高めることにつながる支援や教育が不足しています。

そこで、研究助成を受けた研究では、コミュニケーション能力が職場の人間関係における不安を低減し、保育士ワーク・モチベーションを高めて就労を促進するというモデルを立て、コミュニケーション能力向上のためのソーシャルスキル・トレーニング・プログラムの作成を目的としました。私は、これまで、成人を対象とした体験学習型のソーシャルスキル・トレーニングに携わってきましたため、日向野先生からお声がけいただいてメンバーに加わりました。実のところ、実際の保育士との関わりは、子どもたちがお世話になった・なっている保護者としてのみでしたので、先生方に保育士に関する知識を教えてくださいながら研究を進めています。

Q3：今後の展望などについてお聞かせ下さい。

今回の研究結果から、就業する保育園の規模にあわせたトレーニングを編成する必要性が示唆されました。いわば、カスタマイズ型トレーニングの構想を練るなかで新型コロナウイルス感染症が蔓延し、対面でのソーシャルスキル・トレーニングの実施が難しくなりました。受賞理由として世の中への還元への期待を寄せいただきましたが、この不安な状況だからこそ、より一層、保育士の早期離職の予防が求められるように思います。

保育士を対象とした研修には限りませんが、今年度、WEB会議ツールの利用やDVD、PowerPointに音声を吹き込んでの研修など様々な経験しましたので、それらをヒントに、新しい生活スタイルに合わせたソーシャルスキル・トレーニングを計画中です。



令和2年度 東京未来大学特別研究助成研究発表会（成果報告会）

開催日：令和3（2021）年2月24日（水）

時間：10時30分 角山剛学長挨拶

10時35分 心理系発表，司会：川原正人

10時35分 非心理系発表，司会：田澤佳昭

令和3（2021）年2月24日（水）に，令和2（2020）年度東京未来大学特別研究助成研究発表会（成果報告会）が開催されました（本年度の発表会は，Meetによるオンラインのライブ報告となりました）。午前10時30分，角山剛学長による挨拶に続いて，心理系，非心理系の発表が行われました。発表件数は，全7件でした。

以下に，今回ご発表いただいた先生方のお名前と申請課題（発表タイトル）を紹介いたします。また，この発表会における口頭発表以外の特別助成研究テーマや概要の一部を紹介いたします。

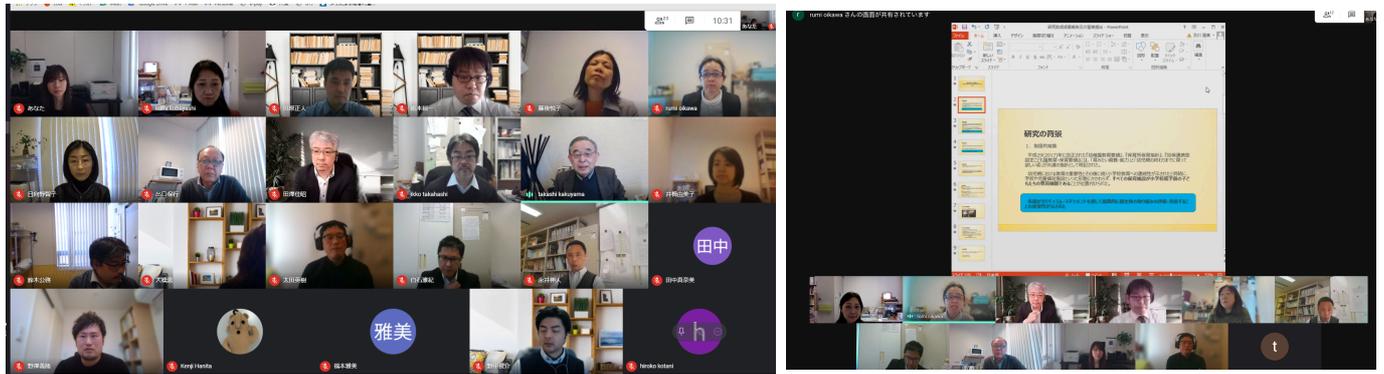
東京未来大学特別研究助成研究発表会 プログラム

心理系 （司会：川原正人）

氏名	申請題目
藤後悦子 （大橋恵・井梅由美子）	スポーツ・ハラスメント防止およびデュアルキャリア形成に向けた絵本教材の効果測定—オーストラリア，日本，中国の3か国の親子関係の比較—
	本研究では，多国籍の比較調査とし，親の習い事への価値観やデュアルキャリア意識の現状を把握した。次に親の子育てに関する絵本の英語版，中国版，ドイツ語版を作成し，親の意識への絵本の効果を明らかにした。
鈴木公啓	身体および身体への意識に係わる諸心理学的検討
野中俊介	ひきこもり者の生活の質に影響を及ぼす心理社会的要因の特定：前向きフォローアップパイロットスタディ
	ひきこもり者の生活の質に影響を及ぼす心理行動的要因を検討した結果，人間関係や外出行動が生活の質に及ぼす影響は時期によって異なり，回復期においてはサポート知覚と生活の質のポジティブな関連性が示唆された。

非心理系 （司会：田澤佳昭）

氏名	申請題目
紙本裕一	小学校教師志望学生のGSfEを用いた合理的配慮の能力開発の研究—同時処理と継次処理に着目して—
	小学校教諭を目指す大学2年生47名を対象に，G Suite for Educationを用いて認知処理の違いを考慮した教材，提示方法力の開発を行った。達成したのは40名で，7名は教材開発ができていなかった。
及川留美	保育の質の向上を目指した「地域への親しみを育む」ための保育指標の作成
白石雅紀 （ト田真一郎・長澤貴）	多文化共生保育に対応する保育者の養成と研修—カリキュラム改善の提言に向けて—
	多文化共生保育における子ども・保護者・保育者の位置づけをアイデンティティ・ポリティックス・インターセクショナルリティ・カルチュラル・スタディーズといった理論的枠組みを元に整理を行った。
田中真奈美	外国人児童生徒のノンフォーマル教育選択と進学—多民族社会米国・タイからの示唆
	米国とタイにおけるノンフォーマル教育からフォーマル教育への接続の制度化のモデルから，ノンフォーマル教育選択の可能性と学校教育への接続の可能性を抽出した研究である。



発表風景

その他の特別研究助成 テーマおよび概要（一部紹介）

氏名	申請題目
井梅由美子・川口めぐみ・大橋恵	遠隔授業を受講している大学生のメンタルヘルスについて COVID-19 の影響で始まった遠隔授業について、長期にわたる生活の変化を余儀なくされた学生の遠隔授業への適応度とメンタルヘルスや不安感、今後の就職活動への意識等について検討することを目的にオンライン調査を行った。
今井康晴	子ども雑誌におけるペスタロッチの受容 わが国の保育・教育、福祉に多大なる影響を与えたペスタロッチの受容について研究した。特に、子ども雑誌におけるペスタロッチの取り扱いなどを検討した。
太田英樹	障害児者とこれを取り巻く社会的問題を初めて学ぶ大学生に対する遠隔授業の検討 遠隔授業で障害児者問題に対する学びを高めるため、文献、写真、報道等を精査し、授業「障害児保育」に活用した。遠隔授業は自分のペースで学べるメリットがある。学生は理解度に合わせ参照し、自己の考えを深めたと考えられた。
大西斎	中等学校の校則の法的分析と学説の検討について 校則の法的性格を検討した。なかでも特別権力関係説と在学契約関係説を対比して学説の分析をおこなった。また、判例について検討を実施した。教育現場の実情や学校の規律維持と、生徒の人権を加味したうえで結論を導き出した。
川口めぐみ・大橋恵・井梅由美子	通学課程の大学生を対象とした遠隔授業へのモチベーションとパーソナリティ特性との関係 Covid-19 により遠隔授業がメインとなった 2020 年度、関東・関西圏の大学生を対象に、遠隔授業の理解度は、授業形態や学生のモチベーション、パーソナリティ特性と関連があるかを明らかにするため、オンライン調査を実施した。
川原正人	ネット依存傾向における困り感は活動内容によって異なるか ネット動画、ソーシャルメディア、ゲームにのめり込むことによって生じる困り感の違いについて検討した。ソーシャルメディアは他の活動よりネットが手放せなくなり情報源が縮小する心理的狭窄の傾向が強かった。
金瑛珠・片川智子	保育者が自ら思い描くキャリアプランと保育者の専門性に関する研究 保育者自身が日々保育を行いながら、どのようなキャリアをイメージし、保育者として成長し続けようとしているのか。また、どこに魅力（やりがいや面白さ）を感じているのかを分析することで、保育者の意思に焦点を当てながら“保育者の専門性とは何か”について研究を進めている。
小林祐一	教職課程における効果的な ICT 活用能力の育成に関する実践研究 Zoom によるアクティブラーニングを実施した。対面授業での主体的な学習の経験が豊富な学生ほど、ブレイクアウトルームやホワイトボードなどのツールを積極的に活用することがわかった。

篠原京子	幼児教育・学校教育における伝承物語や絵本の教育的価値について
	伝承物語や絵本の各作品を分析して、幼稚園領域「言葉」や小学校国語科の指導における伝承物語や絵本の教育的価値を明確にし幼児教育や学校教育における効果的な活用の方法を提案する。
島内晶	記憶の失敗経験に対する周囲の人々の指摘が高齢者のメタ記憶に及ぼす影響
	高齢期には「記憶の失敗経験」が増加し、そのことを周囲の人々から指摘されることも増えると予想される。本研究では、その指摘がメタ記憶（自分の記憶に対する認識）にどのように影響を及ぼすのか検討を行う。
鈴木哲也	理科教育における環境倫理的視点からの環境法に関する考察
	環境法の一つとして「海洋汚染及び海上災害の防止に関する法律」及びこの法律に関する命令をとりあげ、理科の環境倫理的視点と動物・生物種・自然に関する環境法との関連について考察した。
高橋文子	プレ高齢者の生涯学習の質を高め主観的幸福感を向上させる象徴的記憶画研究
	個々の郷愁や価値観を主題とする記憶の表象に着目し、それらを象徴的な記憶画として創出していく方策の構築を、プレ高齢者を対象とした記憶画公開講座及び記憶画研究会参加者の記憶画群を分析、類型化して論じた。
永井伸人	こどもの生活習慣と運動能力について
	社会では、快適で利便性の追求が進み、運動（活動）量や運動スキルの獲得に大きな差があることから、生活習慣ならびに運動に費やす「時間」や「強度」を測定し、身体調整力に与える影響について検討することとした。
野澤義隆	育児期夫婦における親密性の発達的变化に関する研究
	育児期夫婦ペアデータを用いてHLMを行った。結果、二者関係レベルでは親密性は批判を軽減し、批判は育児ストレスを高める。個人レベルでは親密性は促進を高め、促進は育児ストレスを軽減することが示唆された。
三浦卓己	知名度が低い地域でもブランド化は可能か～広域ブランド・瀬戸内DMOからの一考察～
	地域産品に瀬戸内DMOのロゴ・マークを付与することで、消費者の好意度および購入意向はどのような影響を与えるかについての反応を明らかにすることを目的とします。具体的には、地名度の高低それぞれに製品関与の高い製品と製品関与の低い製品を付加した地域産品に視覚的要素であるロゴ・マークと言語的要素である製品情報では、どちらがより効果的に消費者の反応が高まるかを実証研究で明らかにします。
柳生崇志	幼児のFlowを引き出す園環境
	社会情動的スキルとしての粘り強さや協働性の育ちには、主体的に環境と関わりながら遊びに没頭する状態、すなわちFlowの体験が欠かせない。幼児のFlowを惹起する様々な環境要因について考察する。
山崎善弘	日本近世における民衆運動の展開と地域社会
	2020年にハーバード大学の招聘研究員に就任したが、その期間に研究会などで得た知見などを活かし、従来の日本国内での日本史研究にはない視点から、近世における民衆運動と地域社会に関する研究に取り組んだ。

編集後記

本号では特別企画として、学会賞を受賞された先生方にお話をお伺いさせていただきました。先生方には改めて感謝申し上げますとともに、日夜研鑽を積まれてきたことに頭が下がるばかりです。

今年度はコロナ禍に見舞われたため、成果報告会はオンライン報告会となりました。研究面でも勝手が異なる年度でしたが、編集を終えて改めて記事を読み返してみると、困難な状況下にあっても未来大の研究力は衰えを見せていないと断言できるでしょう。最新号、どうぞご味読のほど、よろしく願いいたします。

研究推進委員 山崎善弘